

*Дж. Моріта, викладач*

Київський національний університет імені Тараса Шевченка, м. Київ

*А. Кобаяші, О. Норенко, викладачі,*

Київський національний лінгвістичний університет, м. Київ

森田淳子、講師

タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学、キエフ市

小林亜希子、ノレンコ・オリガ、講師

キエフ国立言語大学、キエフ市

## Can-doリストに基づいたカリキュラムデザインと評価

### —第3回ウクライナ日本語キャンプを例として—

キーワード: Can-do, カリキュラムデザイン, JF日本語教育スタンダード, 日本語キャンプ

## 1. はじめに

### 1.1 背景

キエフ国立言語大学が主催する「ウクライナ日本語キャンプ(以下、キャンプ)」は、2013年7月に「第1回ウクライナ日本語キャンプ(以下、第1回)」, 2014に「第2回ウクライナ日本語キャンプ(以下、第2回)」が開催され、2015年7月に「第3回ウクライナ日本語キャンプ(以下、第3回)」第3回が開催された。ウクライナ各地で日本語を学んでいる学習者と日本語を教えている教師が参加し、日本語の授業、日本文化体験授業、文化祭(学習者たちによる発表会)などを行っている。過去2回は参加者から概ね高評価を得ているが、第2回のアンケート結果の自由記述欄では、参加した学習者が満足していない意見や要望も見られた。具体的には、「日本語母語話者教師を増やしてほしい」<sup>(1)</sup>、「日本語のレベルが低い先生がいた」、「キャンプを始める前に、参加者のレベルをチェックしておいたほうがいいのかと思いました。自分よりもっと高いレベルの学生たちと同じクラスになって、少し難しかったからです」などである。また、教師側からはアンケートや主催者側へ直接の要望として「国際交流基金(以下、JF)専門家によるブラッシュアップ講座を行ってほしい」、「参加した教師・生徒に参加した証明あるいは修了証を発行してほしい」などの意見が寄せられた。これらの意見や要望を受けて、主催者より参加した教師・学習者ともに表彰状が発行されることになった。また、日本語母語話者教師については、第3回では第2回を大きく上回る7名が参加することになり、非母語話者教師が望む教師向けブラッシュアップ講座も実施できることになった。

一方で、第1回・第2回では各教師が自由に日本語の授業内容を決めており、教師同士あるいは運営側も各クラスでどんな授業が実施されたか全体を把握していないということ、また、第3回から参加者に表彰状を発行する上でクラスによって授業内容にばらつきや偏りが生じる可能性があり不適切ではないかなどの課題が挙げられた。この解決のため日本語の授業カリキュラムを作成し、キャンプに参加する教師・学習者と共有することによって、ばらつきや偏りがなく公平な授業実施を目指した。

## 1.2目的

キエフ国立言語大学キャンプ運営スタッフ（以下、運営スタッフ）は、「日本語を勉強する楽しさを知ってもらう」ことと、「これからの日本語の勉強に対するモチベーションを高める」ことを第3回の目的とした。<sup>(2)</sup> キャンプの中心である日本語の授業も、この目的に沿って設計する必要がある。「JF日本語教育スタンダード（以下、JFスタンダード）」は、「日本語を使って何ができるか」という課題遂行能力をレベルの指標にしている。JFスタンダードのCan-do<sup>(4)</sup>を学習目標とすることで、実際のコミュニケーションを目指した学習を設計することができる。学習者が現在の課題遂行能力を知り今後の目標を設定し学習意欲を高める上でも、また、日本語キャンプに参加する教師たちが毎回の授業目標を共有する上でも役立つと考え、JFスタンダードのCan-doを参考にカリキュラムデザインを試みた。

## 2.「第3回ウクライナ日本語キャンプ」概要

### 2.1全体スケジュール

2015年7月8日から13日までの日程で行われた。主な内容である「日本語Ⅰ」～「日本語Ⅵ」の6コマ<sup>(4)</sup>の日本語の授業を午前中に行い、午後「文化体験」の授業を実施した。

表1 第3回ウクライナ日本語キャンプ 全体スケジュール

	7:00-	8:30-	09:30-10:50	11:10-12:30	12:30-14:00	14:00-15:15	15:35-16:50	18:00-
8日						施設到着	開会式	パーティー
9日	運動	朝食	日本語Ⅰ	日本語Ⅱ	昼食	文化体験Ⅰ /文化祭準備	文化体験Ⅱ /文化祭準備	夕食
10日	運動	朝食	日本語Ⅲ	日本語Ⅳ	昼食	文化体験Ⅲ /文化祭準備	文化体験Ⅳ /文化祭準備	夕食
11日	運動	朝食	日本語Ⅴ	日本語Ⅵ	昼食	文化祭準備(学生) ブラッシュアップ講座 (教師)		夕食
12日		朝食	文化祭準備(学生) ブラッシュアップ講座(教師)		昼食	文化祭準備		夕食
13日		朝食	文化祭 9:30-11:30		さよならパーティー 11:45-13:00			

### 2.2 参加対象学習者と教師

第3回のキャンプには、学習者60名<sup>(5)</sup>、教師22名が参加した。学習者は、日本語能力試験N3以下を参加対象者とした<sup>(5)</sup>。第2回のアンケートで要望が出た学

習者のレベル差について配慮し、申込書類記載の日本語能力試験レベルや学習歴（大学生は学年）などを参考に運営スタッフが12人ずつ5クラスに分けた。教師は、原則的に2コマずつ授業を担当した<sup>7)</sup>。

表2 第3回ウクライナ日本語キャンプ クラスとレベル

	青	黄	紫	赤	緑	
人数	12	12	12	12	12	計60人
レベル	N3-N4	N4	N4-N5	N5	N5, なし	

### 2.3日本語学習の目標設定

1.1で述べたとおり、JFスタンダードのCan-doを基に、キャンプの日本語クラスのレベルに応じたカリキュラムを設計した。まず、各クラスで6回の授業を通じて到達する目標を設定した（表3）。大きなレベル差がないクラスでは、共通の目標を掲げた。次に、各回の授業目標を設定した（表4）。ウクライナもしくは日本で日本語のコミュニケーションの必要に迫られそうな場面を想定し、各クラスのレベルごとに到達可能だと思われる目標をCan-doで示した。キャンプ参加教師とは事前にこれを共有し、この目標を到達できる授業を実施してもらうよう協力を仰いだ。

表3 各クラスの到達目標

青	・自分の目標や体験についてくわしく話すことができる。／・自分が出会った日本人を想定した自己紹介、生活、知っている場所についてくわしい説明、約束や予約などができる。
黄	・自分の目標や体験についてくわしく話すことができる。／・自分が出会った日本人を想定した自己紹介、生活、知っている場所についてくわしい説明、約束や予約などができる。
紫	・自分の目標や体験について話すことができる。／・自分が出会った日本人を想定した自己紹介、生活、知っている場所について説明、約束や予約などができる。
赤	・自分の目標や体験についてかんたんに話すことができる。／・自分が出会った日本人を想定した自己紹介、生活についてかんたんな説明、約束や予約、注文などができる。
緑	・自分の目標や体験についてかんたんに話すことができる。／・自分が出会った日本人を想定した自己紹介、生活についてかんたんな説明、約束や予約、注文などができる。

表4 各回授業の到達目標（2日分を抜粋）

時間	クラス	テーマ	目標
日本語Ⅰ 9:30-10:50	青	【自己紹介と目標設定】	・自己紹介で自分のことについて(趣味や特技など)話すことができる。 ・このキャンプでの目標について話すことができる。
	黄		
	紫		
	赤		
	緑		
日本語Ⅱ 11:10-12:30	青	【生活】	・一日の生活(または1週間のスケジュール、キャンプ期間中にしたいことなど)について説明できる。
	黄		
	紫		
	赤		
	緑		
日本語Ⅲ 9:30-10:50	青	【約束・予約】	・友人と出かける約束や交通・お店などの予約ができる。
	黄		
	紫		
	赤		
	緑		
日本語Ⅳ 11:10-12:30	青	【案内】	・住んでいる町や出身地、知っている場所などを案内することができる。
	黄		
	紫	注文・案内	・飲食店での注文や観光案内ができる。
	赤		
	緑		

第2回まで参加した教師が過半数であり、各教師が自由に実施した時と比較して拘束された印象を持たれないよう配慮した。また、教師間でJFスタンダードへの知識の差、または日頃から目標に基づいたコースやカリキュラムデザインの習慣がないなどの差もあったため、教師向け配布資料に「大きなテーマがあるので、それに沿ったクラス活動を行ってください。テーマから外れなければ、授業の進め方は自由です。ゲームでも作文でも文法でも問題ありません。今回のキャンプでは、設定したテーマをもとに、それぞれの先生方の個性を活かしたクラス活動の実施を目指しています。先生方の得意な教え方で、学生たちと楽しく授業をしてください。授業の無い先生方は授業見学が可能です。」と明記し、目標が達成されれば、授業内容は各教師に任せることとした。

### 3.授業実施と評価

#### 3.1 学習者による評価

学習者は、第1回目の授業でクラス目標や各回の授業を確認し自分がどの程度達成できているか、第6回目の授業後にどの程度達成できたかを自己評価してもらった。全ての授業実施後、学習者を対象にアンケートを行った。キャンプ全体への満足度とCan-doによる目標設定に関する箇所を抜粋する(表5)。「Can-doはあなたの学習に役立ったと思いますか」の問いに対して、過半数が「そう思う」、「まあまあそう思う」と肯定的な回答であったが、自由記述欄には不要だという意見も見られた。

#### 3.2 教師による評価

Can-doによる目標設定の有効性についてさらに検証するため、教師を対象にしたアンケートも実施した。学習者による評価同様、キャンプ全体への満足度とCan-doによる目標設定に関する箇所を抜粋する(表6)。学習者同様、Can-doの

有効性について一定の評価を得られたが、自由記述欄にはCan-doや目標設定の意義・目的の周知が不十分だったのではないかという指摘も見られた。

表5 学習者による評価結果

1. 日本語キャンプに参加して、どうでしたか。(有効回答数56/56)					
項目	大変良かった	良かった	普通	良くなかった	大変悪かった
回答数(割合)	44 (78.6%)	12 (21.4%)	0	0	0

  

6. Can-doは、あなたの学習に役立ったと思いますか。					
項目	そう思う	まあまあそう思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
回答数(割合)	25 (45.5%)	18 (32.7%)	10 (18.2%)	2 (3.6%)	0

表6 教師による評価結果

1. 日本語キャンプに参加して、どうでしたか。(有効回答数21/21)					
項目	大変良かった	良かった	普通	良くなかった	大変悪かった
回答数(割合)	16 (76.2%)	5 (23.8%)	0	0	0

  

6. Can-doは参加者の学習に役立ったと思いますか。					
項目	そう思う	まあまあそう思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
回答数(割合)	11 (52.4%)	6 (28.6%)	3 (14.3%)	1 (4.7%)	0

  

8. カリキュラムデザインは、あなたが授業を計画・実施する上で役に立ったと思いますか。					
項目	そう思う	まあまあそう思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
回答数(割合)	14 (66.7%)	4 (19.0%)	2 (9.5%)	1 (4.8%)	0

#### 4.考察

アンケート結果は、Can-doによる目標設定に対して学習者・教師ともに過半数で肯定的な回答が得られた。「どちらでもない」、「そう思わない」を選択した回答者の場合も、否定的な理由のみではなく建設的な改善提案が見られた。特に、学習者の「自己評価するのは難しい。学生たちは過小評価をしてしまうので、先生たちもコメントをしてくれたら、学生も自信がつくかもしれない。」というコメントは、次回以降のキャンプ運営の改善策の一つになると考える。第3回においても、各回授業について教師が学習者にコメントを記載するという案が報告者間でカリキュラム作成時に出たが、短期間で実施されるイベントのため教師に精神的な負担となってしまうのではという恐れから見送った。今後の検討材料としたい。

#### 5.おわりに

本稿では、「第3回ウクライナ日本語キャンプ」における日本語教育活動に関する実践内容を報告した。報告内容以外の日本文化体験などのスケジュール全体を含めて、キャンプ参加者から高評価を得られる事業であった。「第4回ウクライナ日本語キャンプ」開催やカリキュラムについて詳細未定であるが、ぜひ毎年の開催継続を目標とし、本報告も第4回以降の改善に役立てたいと考える。

#### 謝辞

本稿は、国際交流基金「JFにほんご拠点事業」助成を受けキエフ国立言語大学が主催した「第3回ウクライナ日本語キャンプ」における実践活動に関する研究である。主催者はじめ本事業に参加し評価に協力してくださった方々に心より感謝申し上げる。

#### 〔注〕

- (1) 「第2回ウクライナ日本語キャンプ」に参加した母語話者教師は2名だった。
- (2) 「第3回ウクライナ日本語キャンプ」参加者への配布資料に記載。

③「日本語を使って何ができるのか」という課題遂行能力を「～できる」という文で記述したもの。

④ 1 コマは80分。ウクライナの高等教育機関の多くが1 コマ80分であることを基準とした。

学習者は「折紙」と「書道」を1回ずつ体験した。

⑤うち1名(社会人学習者)は、2日目から仕事の都合で不参加。

⑥ 定員以上の参加希望者が見込まれること、また、リピーターより初参加者を優先して受講してほしいことから設定した。

のウクライナ人教師は2名で、日本人教師は1名で担当。

#### 参考文献

(1)国際交流基金(2014)「JF日本語教育スタンダード2010 第三版」国際交流基金

(2)国際交流基金(2013)「JF日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック 第二版」国際交流基金

(3)国際交流基金(2006)「国際交流基金日本語教授法シリーズ 第1巻 日本語教師の役割/コースデザイン」株式会社ひつじ書房

(4)国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」<<https://jfstandard.jp/>> 2016年1月1日参照

*Д. Ояма, докторант,*

Докторантура Осакаського міського  
університету, м.Осака, Японія

大山大樹, 後期博士課程

大阪市立大学大学院, 日本国大阪市

### グループワークにおいて発言の順番を待っている学習者のふりかえりの実際 ——日本語会話クラスの相互行為分析から——

本論文の目的は、筆者が考案した「グループ形式でペアワーク」という活動の方法を紹介し、その有効性を「ふりかえり」の観点から主張することである。そのために、グループワークを記録した動画の相互行為分析により、会話している学習者たちの傍らで自分の順番を待っている学習者が、自発的に三つの異なるあり方の「ふりかえり」を行っていることを示す。この点をふまえ、結論として、「グループ形式でペアワーク」の方法が、学習者に自発的な「ふりかえり」を促す機能を構造的に有することを指摘する。

キーワード：グループワーク, グループ形式でペアワーク, ふりかえり, 相互行為分析

#### 1. はじめに

「学習者中心」の学習-教育観のもと、授業ではグループワークが重視されている。グループワークが導入されるのは、学習者たちが積極的に教え/学びあうことにより、様々な学習効果が期待できるからである。もちろん、グループを組んだからといって、必ずしも学習者たちが積極的にそうするとは限らない。そ